

保育内容研究「人間関係」の指導法に関する一考察

Dalrymple 規子*

Study of how to teach “Human Relationship” in Childcare and Education — Analyzing students’ understanding about “Social development in childhood”—

Noriko DALRYMPLE

保育者養成のための科目「保育内容研究『人間関係』」において、保育者に必要な「観察力」「考察力」を向上させるために、学生達に、子ども達が様々な人との関係を体験している事例や保育現場の視聴覚教材をみせてきた。そしてそれを元に、事例を分析し、子どもの姿の実態・その背後にある思いと、その姿を見ての保育者の思いと行動について、記述する課題を10回出してきている。実際に、学生達はその課題に取り組むことで、「観察力」「考察力」がどのように身についているのか。あるいは、身につけていない学生は、どのような点で躓いているのか検討した。身につけている学生は、子どもの姿・思い、保育者の思い・行動の力動が見えるように、具体的に記述し、思いもより深く考察し、毎回理解が深まっている姿が見られた。一方で、身につけていない学生は、設問自体の意味が把握できていない場合も多く、より細かで具体的な課題の出し方を提示する必要があるのではないかと推察された。

キーワード：人間関係、観察力、考察力、事例分析、保育の質

I. 問題の所在

少子化が進みながらも、待機児童の問題が年々深刻化している昨今、保育所等の施設や保育者の数の問題のみでなく、保育者の質の問題を問われることも多くなってきている(秋田他、2007; 後藤、2011)。その質の問題は、保育者養成機関における学修に大きく関わる問題である。

本学短期大学部幼児教育学科では、2年間の在学中に、学生たちがどのような技術・能力・知識を学修していけばいいかを、2年間を通して体系化している。その中の、「保育の内容・方法」の分野に属する、筆者が担当している保育内容研究「人間関係」

の授業(2年生前期履修)は、保育者養成の幼稚園教育要領及び保育所保育指針の領域「人間関係」のねらい・内容にある子どもの姿に向けて、保育できる保育者を育成することが目的である。つまり、幼稚園教育要領・保育所保育指針が共通に、この保育内容の大きなねらいは、子どもたちが「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」(文部科学省、2008; 厚生労働省、2008) ことであると謳っている。そしてそのためにも、「人とかかわる力の基礎は、自分が保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感をもつこと、さらに、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立

* 短期大学部幼児教育学科

していくことによって培われる」(文部科学省、2008) ことの大切さ、特に「人生の初期に人への基本的信頼感が養われること」(厚生労働省、2008)の重要性を学生たちが学ぶ必要がある。そして、そのことを基盤に、乳幼児が、保育者や友人と共に過ごすことの喜びを味わい、主体的に活動をするようになり、他者とぶつかったり、共感したりしながらかわりを深め、試行錯誤しながらともに活動を展開する楽しさを体験する姿を、一人ひとりの子ども達において発達していくように保育することを学んでいかななくてはならない。

本学幼児教育学科の学生たちは、1年次に幼稚園での教育実習前期を体験している。そのことによって彼らは、授業を聞きながら、園の中での子ども同士の様子や、保育者と子どもの様子をイメージしやすくなっている。そのイメージをさらに深めて理解するために、筆者は、どの章にもふんだんに事例が載せられている「事例で学ぶ保育内容 領域人間関係」(岩立京子編者代表 萌文書林 2008)を教科書として使用している。この教科書においては、保育者が関わる子どもたちの“母-子”、“保育者-子”、“子ども同士”等の関係を、“信頼関係”、“依存と自立”、“自我の発達”、“いざこざ”、“集団”等の視点で見ることによって、様々な子どもの姿が浮かび上がり、理解が深まり、あるいは保育者の支援を考慮することができるようになっている。また、学生が、事例から具体的に、人とのかかわりの中で子どもが育っていくこと(親子の絆の重要性、園における人間関係の広がり、保育者の役割等)を理解することができるようになっている。シラバスにおいては、この教科書を中心に、その他の視聴覚教材も使用している。特に、保育現場では、子どもの発達を的確に把握したり、平岡(2016)が強調しているように、子どもと他者間で起こっていることや実態を的確に捉えることが重要である。その力は「観察力」といえる。そしてその上に、子どもの行為の背景にある意味や思いをどのように捉えていくかという「考察力」、自分のかかわりがどうであったかを考える「内省力」が大切とされている。筆者の授業では、そのうちの、人間関係に焦点を当てた「観察力」「考察力」の育成に力を入れてきている。

シラバスは、授業の形式としては、講義形式、映像を見てあるいは事例を読んだ自分の考えの記

述、事例の分析、グループ・ディスカッション、グループ発表等を取り入れて組んでいる。

シラバス

- ①オリエンテーション・東田直樹さんの特集を視聴して
- ②親との出会いと関わり-1.
- ③保育者との出会いと関わり-リョウガ君(3歳児)のビデオ(小田、2005)を見て-2.
- ④友達との出会いと関わり-事例を読んで…事例を考えるとはどういうことか-3.
- ⑤子どもと保育者の関わり i): ワークショップ(体を動かして感じてみよう) 事例分析-4.
- ⑥子どもと保育者の関わり ii): グループ・ディスカッション
- ⑦子どもと保育者の関わり iii): 各グループによる(教科書の)事例検討発表会-5.
- ⑧遊びの中の人とのかかわり i): 保育実習のエピソードも振り返りながら-6.
- ⑨遊びの中の人とのかかわり ii): リョウガ君(4歳児)のビデオ(小田、2005)を見て-7.
- ⑩遊びのまとめ: あそびについての事例を考える-8.
- ⑪堀合先生のビデオ(実践保育研究会、2001)を見ながら、遊びの中での保育者の役割を考える-9.
- ⑫生活を通して育つ人とのかかわり
- ⑬個と集団の育ち
- ⑭人とのかかわりを見る視点
- ⑮幼児教育の現代的課題と領域「人間関係」: 課題レポート-10.

今回、上記シラバスに記載されている 1.~10. までの計10回課してきた記述式の課題を基に、履修した学生たちがどの程度、子どもの実際の姿を的確に「観察」し、「乳幼児の関係性における心の発達」を理解し、自分自身の「考察力」を深めていけているのか、あるいは授業として、どの部分の改善が必要なのかを考えていきたい。尚、筆者がここで使う「保育」とは、汐見(2016)が定義している「乳幼児期の教育」である。

Ⅱ. 研究方法

本学幼児教育学科の保育内容研究「人間関係」履修学生（2年）105名の中から、10回分の記述式課題をしっかりと書けている学生4名（以後、1グループと記す）、記述の量の少ない学生4名（以後、2グループと記す）を選び、それぞれの記述内容について、比較した。

Ⅲ. 結果及び考察

1. 親との出会いと関わり（H男について）：教科書の事例2-1より

この課題は、H男が、3歳になったばかりの時と、3歳6か月になった時に、同じ状況（母親が病気で、H男より先に布団に入る）の中で、H男が母親に対する態度の変化を表している事例を読んで、H男について思ったこと・考えたことを書かせた。

1グループでは、3歳時と3歳6か月時、それぞれの子どもの状態を具体的に、例えば、「自分の欲求を満たすために泣いた」（3歳時）と「お母さんの体調を心配するようになったので、相手の様子を見て行動できるようになった」（3歳6ヶ月時）と記述し、さらに、その背景にあるのは、「成長や発達」と共に、今までの母親との間の「体験」（母親からトントンしてもらったような体験がある）や「子どもと母親の愛着関係」に依拠すると記述していた。

それに対し、2グループでは、3歳時と3歳6ヶ月時の違いには気づいている（「半年の間に相手の気持ちや状況が自分なりに分かるようになってきた」）ものの、それぞれの子どもの状態やその背景にあるものまで記述することには至っていなかった。

2. 保育者との出会いと関わり（リョウガ君（3歳児）について）：DVD「3年間の保育記録」より

この課題では、映像を見ながら、リョウガ君が初めて幼稚園生活を始める3歳児の様子を①リョウガ君の姿、②リョウガ君の思い、③リョウガ君の姿に対する先生の気持ち、④先生の行動の視点から観察し、気づいたこと・感じたこと・考えたことを書かせた。そして、その上で、映像のタイトルが「よりどころを求めて」となっている理由、1学期間のリョウガ君の変化、リョウガ君と先生の変化を書

かせた。

1グループでは、映像に映るリョウガ君の姿をできるだけ的確に一つ一つ捉えようとしている。それは例えば4月初めの姿から、「お母さんの作った紙飛行機を持って登園する・砂場遊び・寂しくて泣く・隣のクラスの先生を見た後、自分を受け入れてくれる人を探す・お母さんが帰るのを嫌がる・友達と一緒に遊ぶ」と記述していることからみられる。そしてさらに、一つ一つの彼の姿に対する彼自身の思い及びその姿を見ている保育者の気持ちについて、対応するものを考えている。リョウガ君の思いに関しては、「初めての登園で、ドキドキしている心を落ち着かせるもの・お母さんが恋しい、近くにいないと不安・心に余裕が出てきてお友達とのかかわりに楽しさを見出す・慣れてきて安心して遊びだせる場」と記述し、先生の気持ちについては「紙飛行機を通して、コミュニケーションを取り、お母さんがいない不安を和らげたい・お母さんへのケア・今はお母さんと関わりながら、気持ちが落ち着くことをねらう・こどもに付き合う中で、子どもが納得しながら行動できるようにする・お母さんがいることを感じつつ、少しずつ園に慣れていってほしい」と記述している。そして実際に保育者が行った行動を事例より抽出し、「紙飛行機について尋ねる・お母さんに声をかける・お母さんがいるほうに誘導する・リョウガ君の行動をしっかり受け止める・こどもの思いに寄り添い、子どもと共に遊ぶ」と書き記している。

一方、2グループは、例えば「折り紙を持っている・友達と遊ぶ」とリョウガ君の姿を記述し、その思いも「母親を思い出し、不安になる」と書いていて、映像全体の内容的には外れてはいないのだが、姿と思いの間のつながりが見えづらいということ、観察しているシーン数が、1グループに比べて少なく、大雑把であるということが見られる。

3. 友達との出会いと関わり：

教科書の事例2-4～2-7について

この課題は、4つの事例について、「子ども同士の間で何が起きているのか」を、見える場面及び、心の中で起きていることを読み取りながら記述し、その後、ペアで、それぞれが書いたことを分かち合い、相手の考えを新たに記述していくというものである。

それぞれのグループの記述の例は、下記のとおりである。

1 グループ

U介くんは、N美ちゃんとM香ちゃんの遊びを見て、自分もやりたいという気持ちが芽生えたが、N美ちゃんとM香ちゃんに絵本を持っていった時に2人が驚いてしまったために、魅力が少し薄れ、保育者が声をかけたことをきっかけに、次に目に留まったロケットあそびが楽しそうに感じ、そっちに行った。そして、ロケットづくりをしても、二人の姿が見えるとやはり楽しそうに感じ、どちらの遊びにも参加しているのではないかと。

2 グループ

「本を読んでほしい」という思いと、積み木をやりたいという思いがある。自分が持ってきたということを示していたと思う。

1グループにおいては、一人の子どもが起こした行動が、他の子どもの心をどのように揺れ動かし、彼らの行動に影響し、その行動に再び最初の子どもが影響されるという、相互作用の部分丁寧に記述していた。一方、2グループにおいては、事例に主に登場する子どもの思いを考察しようと試みてはいるが、それが関係性の中でどのような力動を生み出しているかまでは、記述がなかった。ただし、両グループ共、ペアとの分かち合いで、相手が自分とは違う考えを持っていることは、記述されていた。

4. 子どもと保育者の関わり：教科書の事例3-1について

この課題は、事例を読んで、感じたこと、思ったことを自由に書き、その後、事例を子どもの様子・保育者の様子で一つ一つ分解し、特に保育者がどのような思いからそのように関わったのかを考え、記述させた。そして、最後にその中で出てくる「中央線あそび」がB夫にとってどのような意味をなしていたかを記述させた。今回は、その中の自由記述と最後の意味の記述の部分と比較した。

1グループにおいては、B夫の姿からB夫に関する理解を導き出していたり（「(前略)案山子を見つ

めたりする様子から、泣いていても保育者が話していることをしっかりと聴いているように感じた）、保育者の姿勢が、B夫の思いに寄り添っていく形で引き出されたりすること（「保育者は(中略)、B夫のしているものを一緒に見ようとしていた）、自分自身の体験からの子どもの思いへのより共感的な理解等が、詳細に記述されていた。

2グループは、B夫の姿に対して、保育者のかかわりが描かれているもの（「B夫が泣いていて、泣き止むように声掛けをするより、B夫が楽しめて泣くことを忘れさせるようなものを、保育者は導けるようにした方がいい）、B夫に対して、どのように保育者の気持ちが感じ、かかわりに繋がっていったかという理解よりも、how to的な形で捉えているのではないかとと思われるものだった。

5. 子どもと保育者の関わり：各グループごとに事例を担当

この課題では、事例3-1でやった事例分析を、別の事例について各グループで話し合いながら、やってもらった。そして、その上で、その事例の中での保育者の役割を皆で話し合い、記述してもらおうというものである。今回は、それぞれのグループで担当する事例が違う。

それぞれのグループの記述の例は、下記のとおりである。

グループ1

友達と協力してつくれるように声をかけ、友達の行っている行動を見て、自分はどの行動したら良いのか、考えられるように協力して作り上げられるような制作物を用意している。やり方が違うからと言って、保育者がやってあげるのではなく、手本を見せ、こうするといいんじゃないかなと声をかけ援助している。

グループ2

保育者からどうするべきかを指示するのではなく、子どもにどうするべきかを考えさせ、自分の口で言えるような声掛けをしている。

記述量は、今まで同様、グループ1が多く、グループ2が少ないが、役割を見つけ出そうという姿勢は

どちらも同じように見られた。グループ1の方が、より詳細に記述しようと試みているのが見られた。

6. 遊びの中の人とのかかわり：各自の保育実習のエピソードより

この課題では、保育実習Iを終えて戻ってきたところで、自分自身の実習での体験から、「実習生と子ども」のエピソードとその考察、「子ども同士」のエピソードとその考察を、それぞれ記述してもらった。

それぞれのグループの記述の例は、下記のとおりである。

1 グループ

(エピソード)

いつも登園してからかばんなどを片付けることが遅いT君がいました。ある日、私が「次、先生が戻ってくるまでに片づけできているといいな」と声をかけると、T君は急いで片づけ始めました。私が戻ってくるまでには、片づけられていました。次の日、私が教室に行くと、T君は私の姿を見つけると、「先生がまた戻ってくるまでに片づけられるよ」と言い、自分から急いで片づけを進める様子が見られました。

(考察)

前の日に行った私の声かけを覚えていて、自分から片付けようと急ぐ姿がみられ、とてもうれしく感じました。T君にとって、片づけをするということが楽しくなっていったのかなと感じました。片づけを急いで早くできるようになっていったことを褒めていくことで、T君にとっても自信に繋がっていくと考えました。

2 グループ

(エピソード)

2歳児を担当している時、一人の男の子がおむつを替えさせてくれなかったのに、4日目くらいになると私の存在に慣れてくれたのか、替えさせてくれた。

(考察)

おむつ替えにも信頼関係が必要だと思った。私ではなく、保育者が「○○くん、おむつ替えよっか」と声をかけるとすぐ替えていたので、まだ

園に来てすぐの私には抵抗もあり、替えさせてくれないのだなと思いました。

1グループは、エピソードに一つのシーンを取り上げ、そこを丁寧に記述し、それに対しての子どもへの理解、保育者がどうかかわっていくことが大切なのかを考え、記述していた。2グループは、特に「実習生と子ども」のエピソードについては、場面を取り上げ、詳細に書くというエピソードというより、大まかな流れの中で子どもの姿を大きくくりで書いていた。ただし、そのように文章は短い、なぜ子どもがエピソードに書いたように変化していったのか、その理由は何かを考え、実習生である自分自身との関係や、自分の関わり方について考察している記述が目立った。これはやはり、現場で実際に子どもと関わるからこそ、体験していることも多く、実習記録にも毎日、様々なことをできるだけ具体的に書くことをしてきたが故に起きている、トレーニング的な効果が見られていると思われる。

7. 遊びの中の人とのかかわり(リョウガ君(4歳児)について)：DVD「3年間の保育記録」より

ここでは、2で見たリョウガ君が4歳児になってからの、遊びの中での保育者との、あるいは友達とのかかわりのシーンを再び見ていながら、リョウガ君の姿と、その姿を見ての保育者の思い、及び、保育者の関わりや心配りについて、映像から姿を捉え、考察したものを記述する課題を出した。

それぞれのグループの記述の例は、下記のとおりである。

1 グループ

(リョウガ君の姿)「部屋に入りたくない」という。家で作った手裏剣を持ってきた。セロテープで貼り付けて、自分で手裏剣を作った。茎の部分がうまく丸められず、嫌になってしまふ。(保育者の思いと関わり・心配り)リョウガ君の好きな手裏剣と一緒に作って励ましている。不安な気持ちを取り除いてあげたいという思い。できない時は先生も一緒にやってあげる。→好きなことを一緒に共有していくことは、子どもも先生とも心が通じ合うと思うので、心をつかめると思ってとてもいいと思った。

2グループ

(リョウガ君の姿) できないと思うとやりたくないという気持ちになる。手裏剣を自分で作り飛ばす楽しさを知る。(保育者の思いと関わり・心配り) やりたくないというのをそのままにせず、できるからとリョウガ君に声をかけて一緒に作るという援助。

1グループは、リョウガ君の具体的な姿を様々なシーンから抽出し、それに対する保育者の思いと姿も詳細に考察し、記述していた。2グループは、具体的な姿に関しては、大雑把に一つ二つと取り上げて記述しているが、それに対する保育者の思いや関わりは、リョウガ君の姿を受けてのものであり、リョウガ君と保育者間の関わりやつながり、力動的なものを感じる記述となっていた。

8. 遊び：実習時のあそびの事例及び教科書の事例について考える

ここでは、再び実習時のあそびのエピソードを記述し、それが子どもにとってどのような意味があるか、その遊びを通して子どもは何を学んでいるのか、人とのかかわりという点に関しては、その遊びがどのような役割を果たしているか、という課題に対して書いてもらった。また、教科書の事例においては、それぞれの子ども姿・思いと保育者の役割について記述することを課題とした。

それぞれのグループの自分自身の事例に関する記述例は、下記のとおりである。

1グループ

実習の時に子どもたちがしていたブロックあそびが心に残っている。男の子たちがブロックを使って、車や飛行機などを自由に作って遊んでいた。その遊びは、子どもにとって自分のイメージを表現したり、物のイメージを膨らませるという意味があると思う。子どもはブロックあそびを通して、イメージの表し方を学んでいると思う。友達を見て真似したり、作り方を聞きにいったて教えてもらいながら一緒に作ったりしていたから、コミュニケーションをとるといった役割があると思う。

2グループ

転がしドッチをした。この遊びで、子どもたちは身体づくりもできるし、ルールを守ることや友達と一緒に遊ぶ協調性が身につく遊びだと思った。

自分自身の事例に関しては、1グループは、あそびのエピソードを具体的に記述しているからこそ、その後の遊びの意味や、子どもの学び、役割に関しても説得力のある記述となっていた。2グループは、遊びを紹介しているものの、具体的にどのような姿を子どもたちがお互いしているのかということイメージするには、記述が足りないように思った。

教科書の事例に関しても、1グループは、子どもの姿から、どのような思いをしているのかをいろいろと推察して丁寧に記述しているが、2グループは、断定的に短く簡潔に書いているため、子どもの姿をイメージしにくい、ということや、他の考え方が入り込む余地がないように感じるような記述の仕方であった。

9. 遊びの中での保育者の役割を考える：堀合先生のVTRより

私たちが、一般的に当たり前と思っていたこと－例えば、自立を大切にするために、子どもに積極的に自分でやるようにすすめていく－が、このVTRの中では、「子ども達にはまず、安心感をどっぷりと全身で感じてもらうことが大切である」という違う視点・信念から、違うかかわり－例えば、上靴を保育者が準備してあげたり、コートの着脱を積極的に手伝ったりという姿－が示されているため、そのギャップの中で、どのようなことを自分たちは考えていくのか、というところをねらいとして、堀合先生のVTRを見せ、自由に思ったこと・考えたことを記述してもらった。

その場面についての、それぞれのグループの記述の例は、下記のとおりである。

1グループ

子どもの自立よりも、手を貸すことにより、子どもが安定して生活することができるように心がけている(カバンの片づけ・上着を脱がせる) ⇒保育者のこのようなかかわりから、子どもは

愛着を感じ、関係が築かれていくのではないだろうかと思った。

2 グループ

子どもの気持ちをよく考えて、保育者は援助、声掛けをするのが大切だと改めて思いました。

上記も含め、VTR 全体についての考察を比較してみると、1 グループは、VTR で示されたことや、堀合先生が保育者として自分の関わりや姿勢について、その根拠を述べていることを詳細に記述している人がほとんどであったのに対し、2 グループは、今まで同様、全体を通して感じた数点について（ただし、それらも大切な学びには変わりはないが）、述べているのにとどまっている。

10. 課題レポート：「自我の成長のために」（津守、2016）を読んで

ここでは、津守氏が書いた「自我の成長のために」を読んで、「自我の成長」が「人間関係を育む力」にどのように関連していくのかについて、自分の意見を記述することを課題とした。

1 グループでは、子どもが人間関係を育む力を育てるためには、保育者や大人とのかかわりが不可欠であり、具体的には、子どもの小さな気持ちを受け止めることが大事であること、そして、それが自我の成長につながるのだということを書いていた。2 グループは、保育者が子どもと関わり、子どもが自分の存在の確かさを自覚することの重要性は書いてはあるので、その大切さには気づいていると思われるが、ではそれがどういうことかという具体性に欠けているため、まだ、彼らがこのことを理解しているのは、ほんやりとしたイメージではないだろうかと思われた。

IV. 今後に向けて

筆者が担当している保育内容研究「人間関係」の授業では、「人間関係」という視点を基にした学生たちの保育に関する「観察力」と「考察力」を向上させていくために進めてきた授業内容を、改めて学生たちの記録を基に精査した。学生たちが、常に、子どもの姿を「見る」事を確実に行之、その奥にあ

る思いや考えを理解し、保育者（あるいは自分自身）がそれをどのように「感じ」、どのように捉えるからこそその関わりの姿を考えていく、という過程（鯨岡2001、笠原2016）を繰り返してやっていくことで、この「観察力」と「考察力」が向上していくのではないかということが示唆された。しかし、その一方で、筆者が意図しているねらいや課題が、学生には十分伝わらず、イメージできないまま、記述式課題に取り組むが故に、書ける内容が少なかったり、課題から少し離れた形で書いてしまったりしている姿も見られた。今後は、今の課題を繰り返しやりつつも、どのような提示の仕方をしていくと、より多くの学生たちに効果的なのかに焦点を当てて、考えていきたい。そして、現場に出た時に、「子どもと出会い、子どもの表現に応答し、子どもとともに現在をつくり、子どもとの間の体験を省察する」（津守、1997）保育者として学び続けられる力を身につけさせたいと思っている。

V. 引用文献

- 秋田喜代美他(2007) 保育の質研究の展望と課題. 東京大学大学院教育学研究科紀要47. 289 - 305.
- 後藤範子(2011) 4年制大学における保育士養成教育と資質能力向上に関する一考察. 東京家政学院大学紀要51. 23-30.
- 平岡康代(2016) 保育の内容を深める「子供の発達と環境」(3歳児未満児). 全国保育士会研究紀要26. 12-24.
- 実践保育研究会(2001)VTR 堀合先生の保育ビデオ 2001 3歳児編：秋, すみれぐみの子ども達.
- 笠原他(2016)保育内容「人間関係」の授業において子供の人間関係をとらえるモデル導入の効果. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要48 205-217.
- 厚生労働省(2008) 保育所保育指針〈平成20年告示〉. フレーベル館 15.
- 厚生労働省(2008) 保育所保育指針解説書. フレーベル館 72.
- 鯨岡峻(2001)保育を支える発達心理学 関係発達保育論入門. ミネルヴァ書房 169.

- 文部科学省(2008) 幼稚園教育要領〈平成20年告示〉. フレーベル館 7.
- 文部科学省(2008)幼稚園教育要領解説. フレーベル館 90.
- 小田豊他監修(2005)DVD 「文部科学省特別選定3年間の保育記録3歳児前半・後半 よりどころを求めて／やりたい、でも、できない」企画・制作：岩波映像株式会社.
- 小田豊他監修(2005)DVD 「文部科学省特別選定3年間の保育記録4歳児・5歳児 先生とともに／育ち合い学び合う生活のなかで」企画・制作：岩波映像株式会社.
- 汐見稔幸(2016) 乳幼児期の教育を保育という(特集第15弾 子ども・子育て支援制度と乳幼児期の教育について考える). 保育通信741. 全国私立保育園連盟 6-10.
- 津守真(1997) 保育者の地平－私的体験から普遍に向けて. ミネルヴァ書房 279.
- 津守真(2016) 巻頭メッセージ 自我の成長のために. 愛育養護学校だより. 愛育養護学校後援会編集(『愛育の庭から 子どもと歩み学ぶ日々』より) 1.